

20世紀前半中国におけるアメリカ棉種の導入について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00000361

20世紀前半中国におけるアメリカ棉種の導入について

弁 納 才 一

はじめに

中華民国時期の農業政策が単に反動的で無意味であったという評価は、すでに過去のものとなり、これらの農業政策が、近代的かつ合理的な志向性を有し、あるいは、一定の成果を生んでいたことが認められるようになってきた¹⁾。その中でも、南京国民政府時期に行なわれた棉花改良事業は、当時から相当の成果を上げたものとして評価されてきた²⁾。

棉花改良事業は、土棉（在来の中国棉種）に代えて米棉（アメリカ棉種）を栽培させようというもので、19世紀末に開始され³⁾、1930年代には本格化して一定の成果を上げるようになった。棉花改良事業にかんする研究は、従来は、政府の動向を追跡する政策史的な視点からの分析が多かったが⁴⁾、近年になって、農民ないし農村側の反応をも組み入れた分析がなされるようになった。ただし、このような研究においても、米棉の栽培を受け入れず、土棉の栽培に固執する農民については、彼らを経済的に支配・操縦している地主・商人による妨害が強調され、あるいは、棉花改良事業を担った省政府の資金・政治面における非力さや、農民に対する無理解などが指摘されている⁵⁾。以上のような説明は、確かに、それに適合的ないくつかの現象を資料の中に見出すことが可能であり、必ずしも全面的に否定されるべきものではない。だが、それは、ある一定の地域内において、米棉の栽培を積極的に受け入れる農民がいる一方で、また、それを容易には受け入れない農民もいた原因を説明しきれてはいない。

そこで、本稿では、このように、一見して全く相反する2つの現象を、1つの社会経済構造の表裏として理解し、農民が米棉の栽培を受容するか否かという選択の違いが発生する原因については、土棉と

米棉の優劣を比較するという、棉花のみに着目するような方法を用いるのではなく、在来綿業の再生産構造の中に位置づけるという方法を用いたい。

よって、本稿は、米棉導入の状況を分析することを中心に据えながら、20世紀前半における中国の在来綿業の再生産構造の特質を解明することを目指しているのであって、中華民国時期の中国において米棉の栽培の導入が成功したか否かという点にかんして結論を下すことを主目的とはしない。

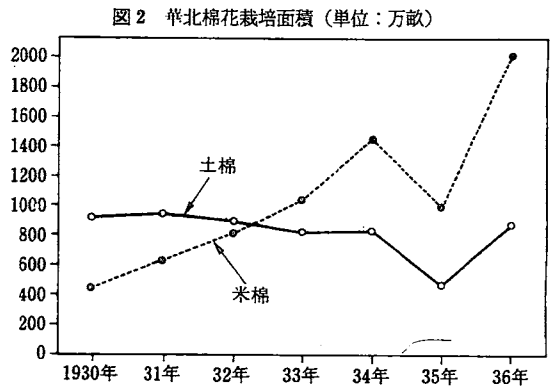
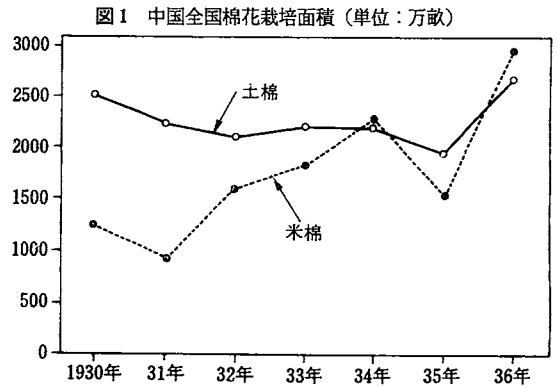
- 1) 拙稿「中華民国期農業に関する日本の研究動向——1980年代以降の研究を中心として——」（『近きに在りて』第24号、1993年11月）を参照。
- 2) たとえば、丁信「支那棉業最近の発達」（日本国際協会太平洋問題調査部編『支那経済建設の全貌』日本国際協会、1937年）226頁、興亜院華中連絡部編『上海ヲ中心トスル中支棉花事情』（興亜院華中資料第74号、中調聯商資料第14号、1939年）6-7頁、華北産業科学研究所『國民政府ノ農業政策』（1937年）97頁などがある。また、戦後においても、王樹槐「棉業統制委員會的工作成效（1933-1937）」（中央研究院近代史研究所編『抗戰前十年國家建設史研討會論文集（1928-1937）』下冊、1984年）が、全国經濟委員會棉業統制委員會の棉花改良事業に言及し、1936年に中国の棉花が入超から出超に転じた重要な原因を棉花の品質の改良と生産量の増加に求め、高く評価している（758-759頁）。
- 3) 趙岡・陳鍾毅『中国棉業史』（聯経出版事業公司、1983年。ただし、初版は1977年）51頁。
- 4) 外務省調査部『支那ニ於ケル棉花奨励誌』（調査29号、1935年）。前掲、丁信「支那棉業最近の発達」。渡辺信一「支那に於ける陸地棉移植普及工作の沿革」（『経済学論集』第13巻第1号、1943年1月）。胡竟良『中国棉産改進黨』（商務印書館、1947年。ただし、初版は、重慶版が1945年、上海版が1946年）。
- 5) 飯塚靖「南京政府期における棉作改良事業の展開

——湖南省を中心に——」(『日本植民地研究』第2号、1989年6月)。同「南京政府期・浙江省における棉作改良事業」(『日本植民地研究』第5号、1993年7月)。なお、同「中国近代における農業技術者の形成と棉作改良問題(I)——東南大学農科の活動を中心に——」(『アジア経済』第33巻第9号、1992年9月)では、南京国民政府が「農業政策の中で棉作改良を重視し、しかも一定の成果をあげることが可能となった」要因を、1920年代以来の棉作改良に関する「技術力・技術者の一定の蓄積」に求めている(45頁)。

I 土棉と米棉

18~19世紀の中国では、江蘇省松江が最大の綿布生産地で、江蘇省と湖北省が二大棉産地を形成していた¹⁾。また、1904年を例にとり、中国の棉花生産量を見てみると、全体で420~430万担で、そのうち通州(南通)²⁾産が100万担、上海・浦東産が130万担、寧波産が60万担、漢口付近で100万担、天津・青島で20~30万担となっていた³⁾。このように、20世紀初頭頃までは華中が中心な棉花生産地だったが、1930年代には、米棉の栽培の拡大によって華北が中心な棉花生産地になっていき、しかも、栽培面積および生産量で米棉が土棉を凌駕するに至った。すなわち、土棉の栽培面積が1930年の2520万畝から1936年には2673万畝へ、また、その生産量は564万担から706万担へと1.2倍の増加にとどまったのに対して、米棉のそれは1930年の1239万畝から1936年には2948万畝へ、また、その生産量は316万担から744万担へと2.3倍も増加した⁴⁾(図1を参照)。

しかし、ここで注目したいのは、米棉が土棉を駆逐して代替していったというよりも、むしろ土棉は依然として一定の栽培面積を維持しつつ、米棉の栽培面積が一方的に拡大したという点である。このような傾向は、特に華北で一層明確に見て取れる。華北では、土棉の栽培面積が1930年の914万畝から1936年には877万畝へ、また、生産量は276万担から219万担へとやや減少したのに対して、米棉のそれは1930年の451万畝から1936年には、2019万畝へと実に4倍強の飛躍的増加を遂げ、また、生産量は100万担から498万担へと約5倍の増加となった⁵⁾(図2を参照)。これに伴って、華北の棉花が全国に占める割合も、栽培面積では36%から51%へ、また、



典拠: 図1、図2とも中華棉業統計会編『民国二十五年中国棉産統計 附二十六年中国棉統計』(1937年)3~11ページ。

生産量では42%から49%へと上昇した⁶⁾。また、これに少し先立って、19世紀後半以降の洋糸(機械製綿糸)の流入によって、華北においても、土棉・土糸を用いた旧来の土布(在来綿布)に代わって、洋糸を原料とする新土布が盛んに生産されるようになった(詳細は後述)。こうして、20世紀前半とりわけ1930年代になって、中国の棉花生産の中心は、華中から華北へと大きく移行しつつあった。

1930年代に米棉の栽培が華中よりもむしろ華北で一層急速に普及した原因については、すでに1941年に名和統一によって、自然的、気象的条件および耕作(輪作)体系の2つの点から極めて説得力に富む説明がなされている。

すなわち、華北の雨量不足は、棉花の播種期には障害となるが、逆に、開花期には棉作特に米棉の栽培にとって有利な条件となり、一方、華中は湿潤で、それに対する抵抗力の弱い米棉の栽培には不利となる。また、華北では一般作物は二年三毛作、棉作は一年一作なのに対して、華中では普通二毛作が行な

図3 山西省棉花栽培面積（単位：万畝）

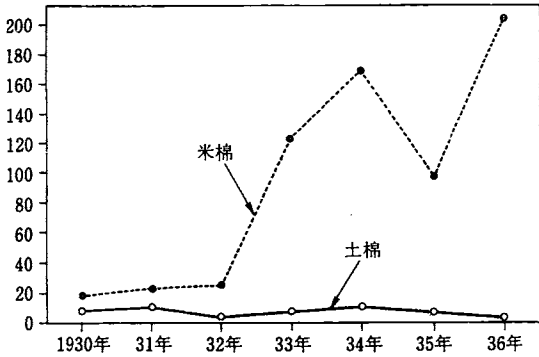


図7 山東省棉花栽培面積（単位：万畝）

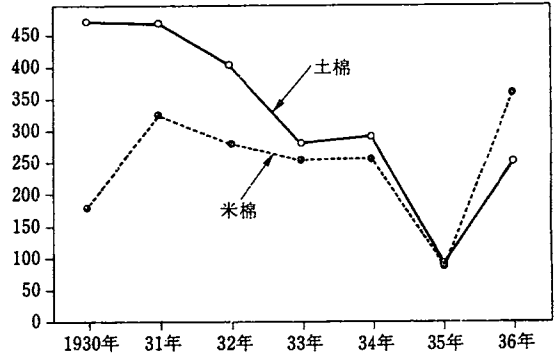


図4 陝西省棉花栽培面積（単位：万畝）

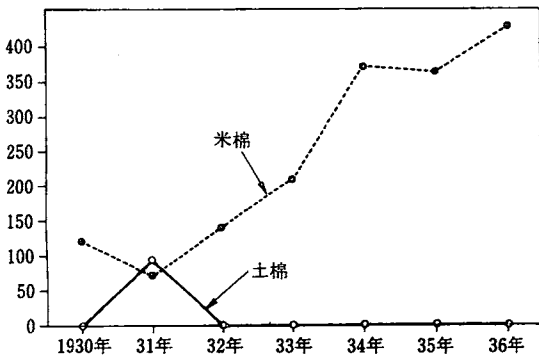


図8 江蘇省棉花栽培面積（単位：万畝）

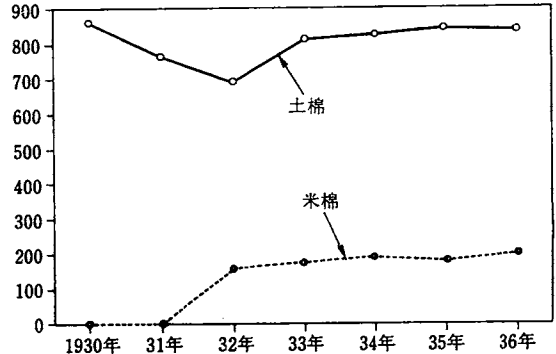


図5 河南省棉花栽培面積（単位：万畝）

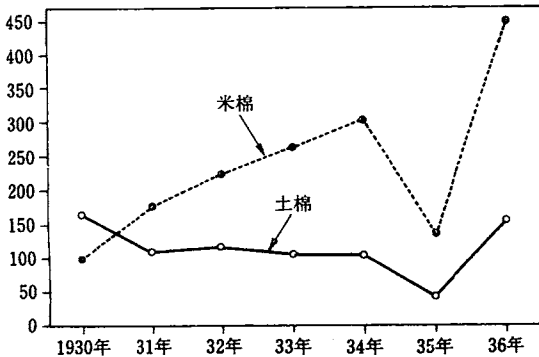


図9 浙江省棉花栽培面積（単位：万畝）

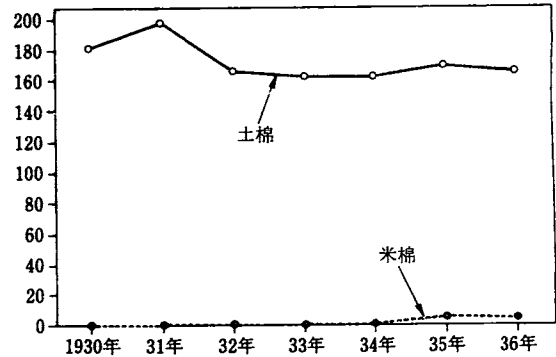


図6 河北省棉花栽培面積（単位：万畝）

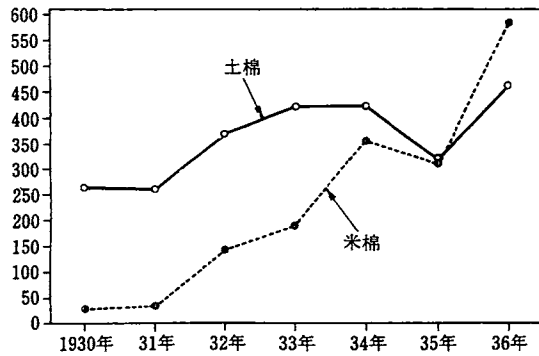
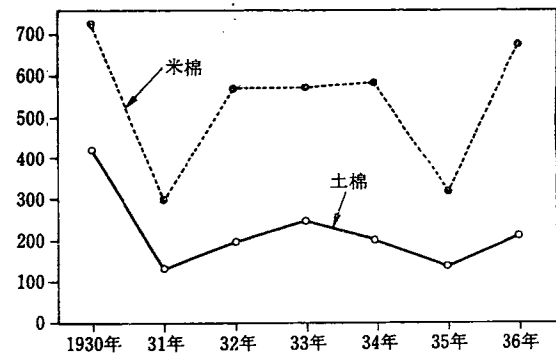


図10 湖北省棉花栽培面積（単位：万畝）



典拠：すべて、中華棉業統計会編『民国二十五年中国棉産統計 附二十六年中国棉統計』（1937年）3～11ページ。

われ、冬作の小麦の後に、夏作として米ないし棉花が栽培されるが、小麦・棉花の二毛作は栽培期間の関係から土棉のみが可能で、土棉より栽培期間の長い米棉を栽培すれば夏作の小麦栽培を犠牲にしなければならず、しかも、華中は米が主要作物で、米は棉花よりも一層土地利用集約度の高い作物であるため、米棉栽培への転換が起りにくい⁷⁾、と。

また、天野元之助は、長江流域では、「米棉種の退化現象」のゆえに、米棉の「品質が黄河流域に比して大差あること」を指摘している⁸⁾。

以上のような説明は、確かに米棉の栽培の導入において生じた華北と華中の差異の原因にかんしては説得力を持つ。しかし、米棉の栽培の受け入れは、省や県によってもかなりの格差があり、名和統一や天野元之助による説明だけではなお不十分であって、これを補強する何らかの他の要因を見出す必要がある。そこで、まず、主要な棉花生産地となっている各省の1930年代における状況について見ていきたい。

華北の陝西省、山西省、河南省では、米棉の栽培面積が急速に拡大し、各省の棉花栽培面積全体の中において圧倒的な割合を占めるようになっていった。すなわち、1930年から1936年までの間の米棉の栽培面積の増加程度と、1936年における米棉の栽培面積が各省の棉花栽培面積全体に占める割合を見ると、陝西省は3.6倍（100%）、山西省は10.7倍（97.9%）、河南省は4.3倍（73.1%）であった。これら3省のうち、特に陝西省と山西省は、かつては棉花栽培がそれほど盛んではなかったが、1930年代に米棉の栽培が急速に拡大した（図3～図5を参照）。これに対して、同じく華北の河北省や山東省では、1936年になってようやく米棉の栽培面積が土棉のそれを陵駕したものの、土棉の栽培面積は、依然として棉花栽培面積全体の中の相当の割合を占め続けていた（図6～図7を参照）。すなわち、米棉の栽培面積が各省の棉花栽培面積全体に占める割合を見ると、河北省は55.8%、山東省は58.7%だった⁹⁾。

一方、華中について見てみると、浙江省では、米棉の栽培がほとんど受け入れられず、また、江蘇省でも、米棉の栽培面積が土棉のそれには及ばなかった。だが、湖北省の米棉の栽培面積は、土棉のそれを圧倒しているばかりでなく、華北のいかなる省の

それをも圧倒している¹⁰⁾（図8～図10を参照）。

以上のように、華北および華中の中でも、それぞれの省によって米棉の栽培の普及にはかなりの差が認められ、米棉の栽培の普及について華北と華中の区別をするだけでは不十分だということがわかる。そこで、以下では、さらに県レベルにおける棉花栽培面積の状況について、1936年の例を中心に見ていきたい。

河南省の主要な棉花栽培地は、安陽で71.5万畝、武安で39.6万畝、太康で39.2万畝、洛陽で33.1万畝、鄧県で25.8万畝、偃師で24.5万畝、臨漳で21.3万畝、新郷で19.5万畝、湯陰で18.9万畝、靈宝で18.5万畝など、同省の各地に広がっており、しかも、上記の県のうち、武安と太康を除く各県で栽培されていた棉花の90%以上は米棉だった¹¹⁾。1918年の推計によると、同省全体の棉花生産量は、約47万担に達し、新野などの省南部の3県では合計約4.5万担、靈宝などの省西部の6県では合計約8.6万担であったのに対して、安陽においては約16万担、武安・臨漳では合計約5万担であり、省全体の棉花の4割以上が安陽などの省北部の3県で生産されていた¹²⁾。しかも、「在來種ハ各地ニ栽培セラレ米國種ハ南部棉産地ノ大部分西部及中部棉産地ノ一部分ノ地方ニ栽培」されており、省北部では、ほとんど土棉が栽培されていた¹³⁾。以上のことから、1930年代になって、とりわけ河南省の北部で土棉の栽培から米棉の栽培へ大きな転換が起こったことがわかる。

山東省の主要な棉花栽培地は、臨清で56.8万畝、館陶で50万畝、夏津で46.8万畝、高唐で45.5万畝、清平で43.8万畝、邱県で31.5万畝、恩県で29.9万畝など、同省の西部に集中していた¹⁴⁾。1910年代末においても、同省の西部は、「山東省ニ於ケル最重要ナル棉作地ニシテ……著名ナルハ臨清縣ヲ中心トセル夏津、武城、恩、平原、高唐、清平、博平、館陶、冠ノ各縣地方ナリ」と言われていた¹⁵⁾。1936年に、夏津や高唐などの一部の県では、米棉の栽培比率が90%を越えていたが、その他の大部分の県では、土棉と米棉の栽培は、ほぼ同程度で¹⁶⁾、山東省は、河南省に比すれば、土棉から米棉への栽培の転換は激しくなかった。

河北省の棉花生産地は、棉花の種類と輸送経路な

どによって、3つの地区に分けられていた。すなわち、省西部の西河（大清河、滹沱河、および滄陽河）区、省南部の御河（南運河）区、省東部の東北河（灤河、北塘河、北運河）区であり、生産される棉花は、各々の地名を冠して、西河棉、御河棉、東北河棉と呼ばれていた¹⁷⁾。同省の土棉の栽培は、趙県で33万畝、晋県で28万畝、東鹿で26万畝、正定で20万畝など、西河区に位置する県で盛んで、逆に、米棉の栽培は、威県で36万畝、冀県で28万畝、永年で25万畝、豊潤で21万畝、寧晋で20万畝、武清で19万畝など、西河区南部、御河区および東北河区に広がっていた。そして、各県の土棉の栽培面積が同県の棉花栽培面積全体に占める割合は、趙県で81%、晋県で88%、東鹿で74%、正定で78%となっており、一方、米棉のそれは、威県で71%、冀県で78%、永年で65%、豊潤で92%、寧晋で56%、武清で84%となっており、土棉と米棉の栽培地は地域的に偏在していたことがわかる¹⁸⁾。

江蘇省では、土棉の栽培は、南通で144万畝、如皋で72万畝、海門で57万畝、太倉で56万畝、南匯で55万畝、阜寧で50万畝、奉賢で43万畝、崇明で38万畝、嘉定で37万畝などとなっていたが、その中でも、太倉、南匯、奉賢、崇明、嘉定、松江、上海、宝山、青浦、江陰、金山、常熟などの上海周辺の県では、米棉が全く栽培されていなかった。逆に、米棉の栽培の盛んな県は、東台で91万畝、阜寧で25万畝、啓東で25万畝、如東で20万畝など、蘇北の沿海地域に集中していた¹⁹⁾。ちなみに、1918年および1929年に棉花栽培面積が広がった県からあげると、1918年には、南通、南匯、海門、崇明、太倉、奉賢、宝山などとなっており²⁰⁾、また、1929年には、南通、如皋、南匯、東台、海門、太倉、崇明、常熟、奉賢、嘉定、塩城、阜寧などとなっているが、このうち、東台、塩城、阜寧では米棉のみが栽培され、南通、南匯、太倉、崇明、常熟、奉賢、嘉定では土棉のみが栽培されていた²¹⁾。これを上記の1936年の状況と比較すると、従来から棉花の栽培が盛んだった上海周辺地域には米棉の栽培がほとんど普及しなかったことがわかる。

湖北省では、土棉の栽培は、黄岡で33万畝、麻城で24万畝、孝感で20万畝、黄梅で17万畝、雲夢で13

万畝など、省東部の家郷地方を中心とした県で盛んで、これらの県では、米棉が全く栽培されていなかった。逆に、米棉の栽培は、棗陽で98万畝、襄陽で65万畝、江陵で62万畝など、省中西部の県で盛んで、これらの県では、土棉が全く栽培されていない²²⁾。

そもそも、長江沿岸一帯では、19世紀末から20世紀初頭にかけて、棉花価格の高騰を受けて、豆、黍、胡麻、米などの栽培を減らして棉花を栽培する農民が増加するようになり、特に湖北省においては従来上海より漢口へ向けて移入されていた棉花が、20世紀初頭には逆に漢口から上海に向けて移出されるようになった²³⁾。また、1919年頃の報告によれば、湖北省で米棉の「栽培ノ盛ナルニ至リシハ最近四五年ノ間ニシテ沙市方面ニテハ武林洋行同地出張所カ六七年前初メテ洋花ヲ土花ト區別シテ取扱ヒシ」とされており²⁴⁾、米棉の栽培が盛んになったのは、20世紀初頭からだった。しかし、こうした趨勢の下にあって、省東部の家郷地方と呼ばれる黄岡・麻城・黄安・黄陂などの県では、1930年代になってもほとんど米棉の栽培を受け入れていなかった。

浙江省では、余姚県の棉花栽培面積が同省の棉花栽培面積全体の半分近くを占め、しかも、同県における米棉の栽培面積は、1936年になっても、それほど拡大しておらず、米棉の栽培の受け入れはあまり進まなかった²⁵⁾。

以上から、従来より棉花栽培の盛んだった地域では、あまり米棉の栽培が受け入れられず、逆に、米棉の栽培が受け入れられたのは、従来あまり棉花栽培の盛んではなかった地域だったことが見て取れる。では、従来から土棉を栽培してきた農民は、なぜ米棉の栽培を容易には受け入れなかったのだろうか。あるいは、逆に、ある地域の農民は、なぜ積極的に米棉の栽培を受け入れたのだろうか。そもそも、土棉と米棉は、具体的にどのような違いがあったのだろうか。

まず、両者の品質上の差異について述べておこう。一般的に言って、米棉は、強靱かつ柔軟で、繊維が頗る細く色沢があったのに対して、土棉は、繊維の長さ、整合率および弾力性が米棉よりもはるかに劣っていたため²⁶⁾、20番手以上の細糸の原料にはならなかった²⁷⁾。さらに、米棉と土棉は、その繊維

の長さによって細分化されている。米棉のうち、繊維の長いものは、その長さが1インチ(2.54cm)以上あり、河南省の靈宝、閿郷、陝州、洛陽、鄭州、彰徳、河北省の東北河、御河、山東省の濱県、高唐、齊東、清平、山西省の平陸、臨汾、曲沃、湖南省の常德、澧県などで生産されていた。また、繊維の短い米棉は、その長さが1~4分の3インチ以上のもので、陝西省の渭南、三原、長安、徑陽、朝邑、湖北省の沙頭、宜昌、荊州、襄陽、公安、および、江蘇省の東台、塩城、阜寧、安徽省の烏江などで生産されていた。他方、土棉甲種は、繊維の長さが8分の5インチ以上で、繊維が頗る細いが、強靱性と弾力性があり、色沢も特別の光輝を有するか、あるいは乳色を帯び、南通、常陰沙、崇明、江陰などで生産され、改良種棉の百万棉も含まれていた。土棉乙種は、品質が甲種よりやや落ち、弾力性があり、色沢はやや乳白色あるいは純白色を帯び、微かに輝きがあり、繊維の長さは8分の5インチ以上で、江蘇省の太倉、上海、南通、安徽省合肥などで生産されていた。土棉丙種は、品質が粗剛で、繊維の長さは2分の1インチ以上のもので、浙江省余姚、江西省九江、湖南省寧郷などで生産されていた。土棉丁種は、品質がさらに粗剛で、繊維は特に短く、10番手前後の糸を紡ぐことしかできなかったが、弾力に富み、強度が大であり、保温力があるので、衣服、布団などの中入れ綿にもっとも適し、日本に輸出されては入れ綿となり、欧米に輸出されては綿毛混入の織物の原料およびカーペットの製造に用いられていた。この種の棉は、主に河北省の西河区などで生産されていた²⁸⁾。

土棉甲種に格付けされていた江蘇省の南通棉は、「米棉ニ疋敵スル良質棉」で、「南通城ヲ中心ニ生産スル上沙花ノ品質ハ中支棉中ニテモ優良ノモノニシテ、二十番手ノ紡績用ニ適ス」という評価を与えられていた。だが、同じ江蘇省の土棉でも、土棉乙種に格付けされていた太倉棉や上海棉は、16番手以下の紡績用に供給されていた²⁹⁾。

土棉丙種に格付けされていた浙江省の寧波棉は、色が白く、光沢があるが、繊維が非常に短く紡績には適さず、多くは日本に輸出されて紡績外の用途に用いられ³⁰⁾、慈谿や鎮海で生産される土棉とともに

に、紡績用としては、16番手以下の混綿用に供給され、中国の棉花の中においては最下位にあるという厳しい評価を与えられていた³¹⁾。

土棉丁種に格付けされていた河北省の西河棉は、1935年に同省で生産された棉花の80%をも占め³²⁾、同省の棉花を代表するものだった。この西河棉は、繊維は短かったが、強靱で、色が純白で弾性に富んでいたため、敷物、布団、火薬の原料などに使用され、また、「紡織混入用として世界第一と云はれ」、日本やアメリカに多量に輸出されていた³³⁾。中でも、同省の晋県は、「西河棉生産地帯の中心地区をなし」、その棉花は、「天津市場に独占的地位を占め天津棉と云はれて長い歴史をもち」³⁴⁾、「米棉の形勢、遠く其の敵にあらざるなり」³⁵⁾という状況で、米棉の栽培はあまり受け入れられなかった。

ところで、晋県の土棉には、もともと繭棉と紫棉の2種類があり、繭棉は同県内で広く栽培されており、「蒲団綿中入綿に好適」だったのに対して、紫棉は「土布の原料として家庭紡系^(マツ)、織布に使用せられてる」³⁶⁾だが、極めてわずかし栽培されていなかった³⁶⁾。やがて、晋県でも、1934年になって初めて陸地棉(米棉)が栽培されるようになり、1936年に同じ河北省の定県から米棉種のキングス種が導入されると、1939年には米棉の普及は約2割になり、さらに、1940年に新たな米棉種のストンビル種が導入・奨励されると、1941年には米棉の栽培は約8割にも達した³⁷⁾。このような急激な米棉の普及の理由については、「繰綿歩合は一般に在来棉より陸地棉のそれが高く、陸地棉にてはストンビル種は特に繰綿歩合が最も高い、キングス、トライス種に比し、ストンビル種は繰綿歩合高いのみならず気候、土質に最も好適し栽培容易にして且つ単位當り収量は極めて多い。……又販賣價格高きのみならず販売容易であるため」³⁸⁾だと説明されている。

湖北省で栽培されていた土棉は、「種類極メテ複雑ニシテ、品質ハ大體ニ江蘇省産ニ比シ稍々劣リ、寧波棉程度ノモノアリ」³⁹⁾と評価されていた。だが、その中でも、「概シテ雲夢、孝感、黄陂、常德及蔡甸地方ノ産最モ良ク、就中雲夢産及普通家郷棉ト稱セラレルル東河、新州産ハ、……色純白ニシテ光澤アルノミナラズ、繊維亦タ細長ニシテ四分ノ三吋内

外ニ及ビ、品質通州棉ト上海棉トヲ混合セルモノニ相当セリ」⁴⁰⁾と言われ、家郷地方の棉花は比較的高い評価を与えられていた。そもそも、家郷棉が質的に優れていたのは、「一般生産者カ棉作ニ熱心ニシテ種子ノ選択ニカメ且栽培法ノ叮嚀ナルニヨル」のであり、また、「元来土布ノ製造ヲ以テ聞ヘタル地方ニハ一般ニ選棉ニ対シ注意ヲ怠ラサル風習存セル」ためだった⁴¹⁾。さらに、「古來土師ノ製造ヲ以テ聞エタル地方ニハ概シテ黒子種ノ多キ」傾向が見られ、この黒子種は「纖維細軟ニシテ繰棉歩合ハ少キモ棉實油分多ク且樹性ハ乾燥ニ對シテ抵抗力強ク」、「土布製織用ヲ目的トシテ棉花ヲ栽培スル場合……即手ヲ以テ紡絲スルニ當リテハ棉ノ纖維ハ或程度マテハ細軟ナルコトヲ必要トスルモノニシテ勢ヒ其ノ目的ニ適スル黒子種ニ重キヲ置ク」ことになると説明されている⁴²⁾。すなわち、家郷地方においては、古くから優れた土布を織るために、その原料として最適な棉花を栽培してきた。

しかし、これに対して、米棉は土布の原料としてはあまり適さなかったようである。たとえば、湖北省への米棉の移植は、1898年に湖広総督張之洞によって始められたが⁴³⁾、当時、米棉は「土布原料トシテハ纖維細軟ニ過キ弾棉ノ際損失量多ク或ハ製織セル布ノ斤量輕ク且耐久力弱キ等ノ關係上一般ノ嗜好ニ適セサリシ」と評価されていた⁴⁴⁾。

さて、土棉と米棉では、品質や用途ばかりでなく、収益性でも差異があった。

たとえば、1920年代の湖北省では、「洋花〔米棉——引用者〕は土花に比し二三兩高價なるを常とす」と言われていた⁴⁵⁾。あるいは、1930年代の浙江省でも、省棉業改良実施区で栽培された改良棉（米棉および中国棉の改良種棉）の1畝当たりの平均生産量は、1933年には90余斤で土棉より10余斤多く、1934年には110~130斤で土棉より20余斤多く、さらに1936年には改良棉の1畝当たりの平均生産量は120~200斤となった。その上、一般に改良棉の販売価格は土棉より1~2割高かった⁴⁶⁾。

資料上の制約から、ここで収益の計算をすることはできないが、米棉が土棉よりも生産コストが高く、一層多くの手間暇を必要としたとしても、なお米棉は土棉よりも収益性が高かったと考えられる。とい

うのは、逆に、もし米棉が土棉に比して収益性が高くなかったと仮定すると、農民の中に積極的に米棉の栽培を受け入れた者がいたことを説明できなくなるからである。

以上のことから、土棉と米棉では、繊維の長さなどの品質面および収益性で差があったばかりでなく、その用途にも違いがあることがわかった。すなわち、米棉は、土棉に比して繊維が長いこと、高番手細糸の原料として適していたのに対して、土棉は、衣服や布団などの中入れ綿として適していた。ただし、河北省の晋県や湖北省の家郷地方は、土棉の栽培が極めて盛んで、その土棉の品質が優れていたという点では共通していたものの、両者の土棉が在来綿業の再生産構造の中で占める位置はかなり異なっていた。すなわち、棉花栽培と織布との結びつきという点から見ると、家郷地方の土棉が、土布の原料として使用されていたのに対して、晋県の土棉の大部分を占める蘭棉は、土布の原料とはなっていなかった。土棉の栽培の盛んな地域でありながら、基本的には土布生産との結びつきを持たなかった晋県で、土棉から米棉への栽培の急激な転換が起こったことから、逆に、土棉の栽培を放棄しなかった地域では、土棉の栽培と土布の生産との間には密接な関係があったことが推察できる。

- 1) 前掲書、『中国棉業史』50頁。
- 2) 興亜院華中連絡部『中支那重要国防資源棉花、麻、調査報告』（華中連絡部調査報告^(ママ)シリーズ第46輯、国防資源資料第7・19号、農産資源資料第1・13号、1940年）によれば、「長江以北即チ南通、海門、崇明等ニ産スル棉花ヲ総称シテ通州棉ト云ヒ通州棉ノ中ニ上沙花、中沙花、下沙花ノ三種アリ」という（9頁）。
- 3) 橋本奇策『清國の綿業』（1905年）2頁。
- 4) 中華棉業統計会『民国二十五年中国棉産統計 附二十六年中国棉産統計』（1937年。1939年、華北棉産改進会調査科翻印。以下、『民国二十五年中国棉産統計』と略記する。）3-11頁。
- 5) 同上。
- 6) 同上書、3-11頁より算出。
- 7) 名和統一「支那に於ける紡績業と棉花——支那に於ける工業と農業との聯繫に関する一個の研究——」（神戸正雄編『東亜經濟研究(1)』有斐閣、1941年）。
- 8) 天野元之助『中国農業史研究 増補版』（御茶の水

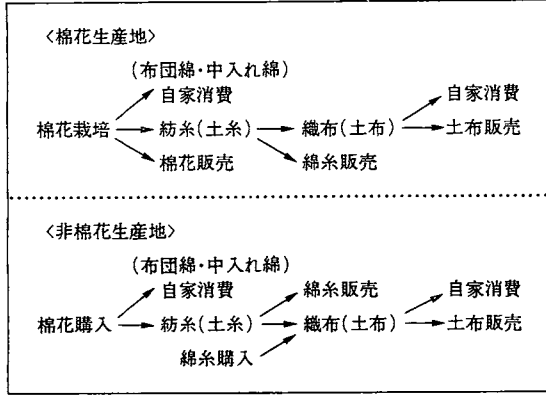
- 書房, 1979年) 648-650頁。
- 9) 前掲書, 『民国二十五年中国棉産統計』 3頁および9頁より算出。
 - 10) 注4に同じ。
 - 11) 前掲書, 『民国二十五年中国棉産統計』 37-42頁。
ただし, 武安と臨漳は, 現在, 河北省に属している。
また, 1936年における武安と太康の米棉の栽培比率は,
それぞれ60%と69.9%であった。
 - 12) 「支那棉花ニ関スル調査(湖北省, 河南省)」(臨時産業調査局『支那棉花ニ関スル調査(其ノ二)』1919年) 157頁。
 - 13) 同上, 161頁。
 - 14) 前掲書, 『民国二十五年中国棉産統計』 26-31頁。
 - 15) 「支那棉花ニ関スル調査(山東省, 直隸省, 山西省)」(臨時産業調査局『支那棉花ニ関スル調査(其ノ一)』1918年) 20頁。
 - 16) 前掲書, 『民国二十五年中国棉産統計』 26-31頁より算出。
 - 17) 南滿州鉄道株式会社北支事務局調査班『天津棉花運銷概況(附天津棉花統計)』(北支經濟資料第39, 1937年) 6頁。
 - 18) 前掲書, 『民国二十五年中国棉産統計』 17-25頁より算出。
 - 19) 興亜院華中連絡部『中支棉花ノ改良並ニ増産』(興亜華中資料第235号, 中調聯農資料第15号, 1940年) 6-7頁。
 - 20) 「支那棉花ニ関スル調査(江蘇省, 浙江省, 安徽省)」(臨時産業調査局『支那棉花ニ関スル調査(其ノ一)』1918年) 12-14頁。
 - 21) 華商紗廠聯合会棉産統計部『中国棉産統計』(1929年) 44-45頁。
 - 22) 前掲書, 『中支棉花ノ改良並ニ増産』 13-15頁。
 - 23) 前掲書, 『清国の綿業』 23頁。
 - 24) 前掲, 「支那棉花ニ関スル調査(湖北省, 河南省)」 24頁。
 - 25) 前掲書, 『民国二十五年中国棉産統計』 51-52頁。
 - 26) 金国宝『中国綿業問題』(商務院書館, 1936年) 48頁。
 - 27) 台湾総督府『支那ノ棉花』(大正六年八月殖産局商工課調査, 南支那及南洋調査第19, 1918年) 24頁。
 - 28) 前掲書, 『中国綿業問題』 48-50頁。
 - 29) 前掲書, 『中支那重要国防資源棉花, 麻, 調査報告』 8-10頁。
 - 30) 前掲書, 『支那ノ棉花』 25頁。
 - 31) 前掲書, 『中支那重要国防資源棉花, 麻, 調査報告』 10頁。
 - 32) 南滿州鉄道株式会社北支事務局調査班『天津棉花運銷概況(附天津棉花統計)』(北支經濟資料第39, 1937年) 第三表: 河北省各県棉花産額表(民国二十四年)。
 - 33) 同上書, 6頁。
 - 34) 南滿州鉄道株式会社調査部『河北省晋県農村実態調査報告書——晋県に於ける棉作事情調査を中心として——』(滿鉄調査研究資料第53編, 北支調査資料第26輯, 1942年。以下, 『河北省晋県農村実態調査報告書』と略記する) 9-10頁。
 - 35) 南滿州鉄道株式会社天津事務所調査課『河北省棉産調査報告書』(北支經濟資料第35輯, 1937年) 160頁。
 - 36) 前掲書, 『河北省晋県農村実態調査報告書』 81頁。
なお, 南滿州鉄道株式会社調査部『北支棉花綜覧』(日本評論社, 1940年)によれば, 繭棉は, 纖維が極めて粗剛であるが, 色は純白にして弾力に富み, 華北では西河棉の名を以て知られており, 他方の紫棉は, 纖維が比較的柔軟であったという(211-212頁)。
 - 37) 注34に同じ。
 - 38) 前掲書, 『河北省晋県農村実態調査報告書』 82頁。
なお, 前掲書, 『北支棉花綜覧』によれば, 米棉(陸地棉)の中国における呼称は, トライス種が脱里司または脱字棉, キングス種が金字棉または金氏棉, ストンビル種が斯字棉であり, 華北では, トライス種が陸地棉の大半を占め, キングス種がこれに次ぎ, ストンビル種は1933年になって初めて華北に輸入されたという(203-206頁)。
 - 39) 前掲書, 『中支那重要国防資源棉花, 麻, 調査報告』 11頁。
 - 40) 前掲書, 『支那ノ棉花』 26頁。
 - 41) 前掲書, 「支那棉花ニ関スル調査(湖北省, 河南省)」 27頁。
 - 42) 同上, 21-22頁。
 - 43) 前掲書, 『中国棉産改進黨』 5-6頁。
 - 44) 前掲, 「支那棉花ニ関スル調査(湖北省, 河南省)」 25頁。
 - 45) 「沙市地方に於ける棉花の収獲^(マツ)」(『大日本紡績聯合会月報』第350号, 1921年10月) 85頁。
 - 46) 邵亮熙「浙江綿業推広之途徑」(『浙江省建設月刊』第10卷第6期, 1936年12月) 3-5頁。

II 在来綿業の再生産構造

中国の在来綿業の再生産構造は, 棉花を生産しているか否かによって, 以下のように, ほぼ2つに大別できる(図11)。

以上のような在来綿業の再生産構造が, 洋布や洋糸の流入によって一定の変容を余儀なくされたこと

図11 中国在来綿業の再生産構造



については、すでに詳細な検討がなされている¹⁾。だが、棉花をも含んだ在来綿業の再生産構造の特質まで視野に入れた分析は、これまでほとんどなされていない²⁾。

そこで、以下では、棉花栽培と土糸・土布生産の關係に留意しながら、いくつかの省の20世紀前半における在来綿業の状況を見ていきたい。

河南省では、1910年代末に、「土布ノ製造ハ湖北省ノ盛ナルニ及ハサルコト遠シ……著名ナルハ洛陽縣新野縣太康縣禹縣許昌縣ニシテ製造額多シ土布ノ原料ハ手紡糸及紡績糸ニシテ洛陽縣新野縣太康縣地方ハ専ラ手紡糸ヲ用キ許昌縣禹縣等ハ殆ント紡績糸ノミヲ使用ス」と言われ、手紡糸（土糸）のみを原料としていた洛陽縣では、約10万疋の土布が生産されていたが、その「原料棉花ハ当地産ノ外靈寶及陝縣地方産ノモノヲ用」いていた³⁾。そして、1930年代には、禹縣、新郷、汲縣、開封、温縣、密縣、許昌、孟縣、南陽、臨潁などの縣では、毎年10万疋前後の土布が生産されていたが、かつて土糸のみを用いて土布を生産していた洛陽、新野、太康の3縣の名は見えない⁴⁾。しかも、1936年の太康縣の土棉栽培面積は約11万畝で、同縣の棉花栽培面積全体の30%を占めていたが、洛陽縣の米棉栽培面積は約33万畝で、同縣の棉花栽培面積全体の99.5%を占め、また、新野縣の米棉栽培面積は10.8万畝で、同縣の棉花栽培面積全体の98.6%を占め、洛陽と新野の兩縣では土棉がほとんど栽培されなくなっていた。なお、洛陽縣がかつて原料棉花の供給を仰いでいた靈寶縣や陝縣では、1936年には土棉が全く栽培されおらず、米棉のみが栽培されていた⁵⁾。以上から推

察すると、20世紀前半の河南省では、棉花の生産者と紡糸・織布に従事する者とは、かなりの程度分離しており、土布生産者の多くは、原料棉花を他縣から購入せざるをえなかったと考えられる。

山西省では、1910年代末に、「産棉地方ニアリテハ紡績糸ノ需要少ナク榮河縣ノ如キハ縣城内ノ雜貨店ヲ物色セルニ双子ノ縫糸ノミニシテ单子ノ紡績糸ヲ賣ル店ナシ之レ自家産棉ヲ以テ紡糸シ織布スルヲ以テ其ノ需要無キニ因ル」と言われていたが、そのような棉花生産地で生産された「純土布ハ寧口家内工業ノ發達ニ伴ヒ漸次其生産ヲ減シ棉花移出量ヲ増大スル結果トナル可シ」と見なされていた⁶⁾。そして、このような土布生産の衰退に伴って、「山西省ノ棉花ハ漸次米棉ニ変シツツアリ近キ将来ニ於テ陝西省ニ見ルカ如ク洪洞以北全部米棉トナル可キ趨勢ニア」った⁷⁾。なお、1934年の調査によれば、山西省では、土布業があまり發達しておらず、年間10万疋以上の土布を生産する縣は、わずかに9縣にすぎなかった。しかも、それらの土布は、ほとんど省外に移出されることもなかった⁸⁾。

山東省では、1910年代末に、「土布生産高ハ夥シキモノナルカ市場ニ賣買セラルルヲ常トシ街頭ノ店舗ニ見受クルコト少ナシ、土布ハ經糸又ハ横糸何レカノーツニ紡績糸ヲ用ヒタルモノ最多ク双方ニ用ヒタルモノ之レニ次キ、自家紡糸ノミヲ以テ製シタルモノハ賣買少ク自家用ニ消費」されていた⁹⁾。そして、1930年代には、棉花の主要な生産地だった省の西部では、棉花栽培農家で紡織を兼営する者が多かったが、あまり棉花が栽培されていなかった省の東部では、洋糸を用いて新土布が生産されていた。また、1935年の調査によれば、山東省において、10万疋以上の土布を生産していた縣は、省西部の長清、樂陵、鄒縣、荷沢、定陶、野城、堂邑、高唐、臨濟、武城、德平、臨邑、平陰、および、省東部の濰縣、即墨、益都、広饒、寿光、昌邑など、19縣にも達し、このうち、同省の東部に位置する濰縣が織布地区の中心をなしていた¹⁰⁾。

河北省では、1910年代末に、「土布ノ産額ハ夥シキモノナルカ之レ高陽初メ各機業地ニ於テ生産セラルルモノニシテ經、横共ニ紡績糸ヲ使用シ自家紡糸ヲ以テ製織セラレタル土布ハ多く自家用ニ供セラレ

市場に販賣セラルル量ハ極メテ少ナ」¹¹⁾。河北省の中で最も著名な織布地区であった高陽では、1920年代後半の最盛期に380万疋以上の土布が生産され、1932年に至ってもなお130万疋以上の土布が生産されていた。また、宝坻では、1923年の最盛期に約480万疋の土布が生産され、1933年に至っても約160万疋の土布が生産されていた。さらに、定県では、1915年の最盛期に約400万疋もの土布が移出され、1931年に至っても160万疋以上の土布が生産されていた¹²⁾。

ところで、華北における土布の生産は、1930年前後には、「山東省における濰県、河北省における高陽、宝坻の三つの大織布区に集中され、それ等が全生産のほぼ半ば（約四五％）を占めていた」とされる¹³⁾。ただ、これらの土布の生産地は、主要な棉花の生産地とは言えず、土布の原料は土糸ではなく洋糸であった¹⁴⁾。これに対して、定県の土布は、縦糸には洋糸を用いるようになっていったが、横糸には依然として土糸を用いていた。しかし、その土糸も、自ら栽培した棉花から紡ぎ出された綿糸ではなく、購入された綿糸が多かった。すなわち、その横糸用の土糸を売買する定県の定期市では、普通、綿糸生産者は、綿布生産者に1斤の綿糸を売り、綿布生産者は、綿糸生産者に1斤の棉花と銅錢40～50枚を手渡していた¹⁵⁾。さらに、1931年の調査によれば、定県において紡糸に従事する農家2万8367戸のうち、紡糸のみに従事する者が約80％を占め、一方、織布に従事する農家1万3385戸のうち、織布のみに従事する者は約83％であった¹⁶⁾。このように、土布の横糸に土糸を用い続けていた定県でも、濰県や高陽などと同様に、棉花の栽培、紡糸、織布の各工程の分業化はかなり進んでいた。

他方、華中の各省における在来綿業の状況はどうだったのだろうか。

江蘇省では、1910年代末に、「紡績工場以外ニ棉花ノ消費セラルル手紡用及中入用ニシテ……通州方面、江陰及浦東地方ハ土布ノ製造盛ニシテニ費ス棉花ノ量亦少カラサリシ……一九一一年支那政府カ当業者ヲシテ調査セシメタリト称スルモノニヨレハ通州棉、上海棉、太倉棉ノ土布及寒衣（中入用）用ニ消費セラルル量ヲ七十万担トセリ、……最近ニ

於ケル手紡用及中入用消費額ヲ推定スルニ恐ラク四十万担乃至五十万担位ナルヘキカ」¹⁷⁾ というような状況で、相当の量の土棉が、衣服の中入れ綿として用いられた以外に、糸に紡がれて土布の原料ともなったのであり、やはり土棉の栽培と土布の生産との間には密接な関係があった。そして、1934年の調査によれば、南通、江陰、武進、常熟の4県における年間の土布生産量は、各々200万疋以上で、崇明では100万疋以上、松江、海門、呉県、無錫、溧陽、鎮江、南京、銅山では、それぞれ10万疋ないし90万疋の土布が生産されていた¹⁸⁾。

南通では、1884年前後、洋糸が流入すると、縦糸に洋糸、横糸に土糸を用いた新土布が生産されるようになった¹⁹⁾。縦糸と横糸の両方に土糸を用いた旧来の土布は尺套布と呼ばれ、また、新土布は大尺布と呼ばれた。大尺布は、尺套布に比べて、幅が約20％広く、長さが約2倍で、価格も2倍あまり高かった²⁰⁾。さらに、1930年代初め頃までには、大尺布のうち、小牌、群牌、提牌の3種類の土布は、縦糸に洋糸、横糸に土糸を用い続けたが、次中、中牌、雑大、大牌、特大の5種類の土布は、縦糸と横糸の両方に洋糸を用いるようになっていた。しかも、1930年代には、土糸のみを用いた尺套布は、大尺布の発展に押されて完全に消滅してしまっていた²¹⁾。20世紀初めには、小牌、群牌、提牌は、徐々に衰退しており、大牌、中牌などが継続的に発展していたために、土糸に対する需要は減少していたが、逆に、洋糸に対する需要は高まっていた²²⁾。このように、1930年代には、南通の土布のほとんどは、その原料に洋糸を用いた新土布となっていた²³⁾。

武進（常州）では、ほとんど棉花が生産されなかったため、近隣の江陰、常熟、南通などから棉花を購入して土布を生産していたが、20世紀初めに、洋糸が流入すると、縦糸と横糸の両方に洋糸を用いた新土布が生産されるようになり、1918年には約500万疋の土布が生産されていた。1912年前後には、土布の原料の大部分が洋糸になっており、土糸のみを用いた土布は、抗日戦争前までにはほとんど淘汰されていた²⁴⁾。

無錫でも、棉花はほとんど生産されなかったもので、近隣の棉花生産地から棉花を購入していたが、20世

紀初めに、洋糸が流入すると、縦糸と横糸の両方に洋糸を用いた新土布が生産されるようになり、1920年代には、土糸のみを用いた土布は消滅し、洋糸を用いた新土布もしばらくして衰退していった²⁵⁾。

これに対して、江陰においては、アヘン戦争以前には、棉花生産地域の農家は、棉花から糸を紡ぎ出して布を織り、非棉花生産地域の農家は、棉花を購入して糸を紡いで布を織るか、あるいは、糸を買って布を織っていた。アヘン戦争以降、洋糸が流入すると、徐々に土布の原料として洋糸を用いるものも現れた。江陰の土布には、小布、大布、改良土布の3種類があり、1920年代までは、小布が土布の中で最も優勢であった。そして、小布と大布の最盛期であった1920年前後には、小布が1000万疋近くも販売され、大布を代表する郷丈大布（大きさが小布の2倍を越える）が約150万疋も生産されていた。改良土布の生産は、1924年以降に盛んになり、抗日戦争開始の前年には、小布が約230万疋、郷丈大布が約100万疋の生産にとどまったのに対して、改良土布は約350万疋も生産された。小布は、一般的に、幅は1尺（32cm）を越えず、長さは24尺を越えなかった。その原料は、縦糸と横糸の両方に土糸を用いたものから、縦糸に洋糸、横糸に土糸を用いたものへ、さらに、縦糸と横糸の両方に洋糸を用いたものへと、三段階の発展を経たとされるが、この変化はかなりゆっくりと進んだのであり、土糸は駆逐されずに相当残っていた。郷丈大布は、幅が8寸3分、長さが43～44尺あり、もともとは縦糸と横糸の両方に洋糸を用いていたが、1905年前後に、縦糸に洋糸が用いられるようになり、その後、徐々に縦糸と横糸の両方に洋糸が用いられるようになった²⁶⁾。だが、その多くは、長らく縦糸に洋糸、横糸に土糸を用い続けたのである。

さらに、常熟は、古くから土棉の栽培とともに、土布の生産も盛んであった。やがて、清末に、洋糸が流入すると、縦糸に洋糸、横糸に土糸を用いた新土布が生産されるようになり、これらの新土布は、熟布または小布と呼ばれた。さらには、洋糸のみを用いた放機布も盛んに生産されるようになった。こうして、1920～30年の期間、年平均の土布生産量は1200～1500万疋にも達した。このうち、熟布は700

～800万疋も生産されていた。だが、1930年以降、常熟の土布は著しく衰退し、特に放機布の生産量は1920年代のほぼ半分にまで減少し、抗日戦争直前には、常熟の土布の全体の生産量も800～900万疋にまで減少していた²⁷⁾。

江蘇省における土布の生産は、南通のように男子によって行なわれ²⁸⁾、副業としての位置を越えて、本業となっていたものもあったと考えられるが、一般的には、婦女子による家庭内の副業として行なわれていた。

湖北省では、1910年代末に、「古来土布ノ産地ヲ以テ聞エ其ノ製品ハ省内ノ需要ヲ満タセル外河南、湖南、江西、四川、陝西、甘肅諸省及遠ク伊犁、新疆地方ニ移出ス」るほど²⁹⁾、土布の生産地が盛んだった。そして、その土布のうち、「上等品は輸入綿糸を経緯とするも中等品及下等品は輸入綿糸又は手紡糸を經とし手紡糸を緯糸とす」るもので、縦糸・横糸ともに土糸を用いた旧来型の土布の生産量は、「約全織布高の二割と概算さる」状況になっていた³⁰⁾。さらに、1934年の調査によると、湖北省全体の土布生産量は年間690万疋で、そのうち、黄岡県では約220万疋、孝感県では約70万疋、光化、天門、宜昌、武昌、麻城、宜都、襄陽、江陵、荊門、応陵、漢陽、雲夢などの県では、10万疋から50万疋の土布が生産されていた³¹⁾。

このうち、湖北省東部の黄岡県を代表とする家郷地方は、土棉とともに土布の生産も盛んで、その土布の原料は、1910年代末には、縦糸・横糸ともに土糸を用いたものが大部分を占め³²⁾、1930年代になっても、黄岡県の「農家では織布が家内工業として行はれ、毎年綿布の輸出高は五、六十万元に達し消費棉花は全産額の六五%である……農民は春季、麦作の収穫によって生活費の大半を賄ひ得るのであって棉花の全収穫高の六十%を売出し、四十%を秋冬季自家の紡績用となる」と言われ³³⁾、相当量の土棉が土糸・土布の原料となっていた。ちなみに、1936年には、省外に移出される棉花180.5万担を除いた69.5万担のうち、例年の状況から、農民が紡糸のために手元にとどめておく棉花は、25万担にも達すると予想されていた³⁴⁾。すなわち、湖北省内の棉花消費量全体の約36%もの棉花が土糸・土布にな

ると見込まれていたことになる。

一方、同じ湖北省の西部の沙市の周辺地域（現、荊州地区の南部）は、「従来木綿織物の一大産地にて荆布の名頗る高く上流四川、雲南及貴州方向へ年々輸出せらるゝもの少なからざりしか皆家内工場に属し農家耕作の間に織り上ぐるもの」で³⁵⁾、その「綿布は孰れも手紡手織にして別に紡織工場の設けあるにあらず農家一般婦女子の副業」として行なわれていた。これらの土布は、大布、庄布、小布の3種類に大別されていた。このうち、大布は、荆庄大布と呼ばれ、幅は1尺1寸5分、長さは4丈前後であり、その「原料は従前土紗即ち手紡糸のみを用ひ来りしか近來〔19~20世紀交——引用者〕洋紗の輸入ありしより經糸に洋紗緯糸に土紗を用ゆるもの多し又洋糸のみを用ひ織造するものあり」というように、土糸から洋糸へ変化しつつあった。また、荆庄大布の中の白木綿の生産額は、沙市の周辺地域において生産される「各土布中第一位に居」り、その「仕向先の第一位を占むるものは四川地方」であった³⁶⁾。また、庄布は、梭布とも呼ばれ、幅は1尺、長さは2丈8尺で、その原料は、「従前土沙のみを用ひたりしか近來〔19~20世紀交——引用者〕^(ママ)は重^(ママ)に洋沙^(ママ)を經に土沙^(ママ)を緯に用」いるようになった。さらに、小布は、大布に対して名付けられたもので、普通は、幅は8寸5分、長さは1丈6尺と規定されており、その原料は、「大布と同じく^(ママ)土沙^(ママ)と洋沙^(ママ)を交へ用ひ又全く洋沙^(ママ)のみのものもあ」った³⁷⁾。

一般に、沙市の周辺地域の土布の原料には、19世紀末頃から、「輸入綿糸を用ふるに至り……手製綿糸を以て織布せるものは現今〔1915年——引用者〕甚だ減少し全産額の十分一に過ぎる」状況であった。なお、沙市の周辺地域における1915年の土布の「産額は大布約四十餘萬疋庄布約二十七、八萬疋に達すべく而して従前に比し著るしき減少」を示していた³⁸⁾。

以上のように、19世紀末以降、沙市の周辺地域の土布が、洋糸を用いた新土布へと変化していったのは、土布の最大の仕向地だった四川省でも、洋糸の流入とともに、洋糸を縦糸のみに、あるいは、縦糸と横糸の両方に用いた新土布が生産されるようになり、徐々に沙市の周辺地域の旧来の土布（特に、荆

庄大布）を駆逐するようになったのに対抗して³⁹⁾、沙市の周辺地域でも土布の原料として洋糸を用いた新土布を生産せざるをえなくなったからである。そして、1920年代前半には、「沙市地方産出棉花は……毎年作付地畝の増加及土花（在來種にして蒲團^(ママ)棉用）の栽培減少し細毛にして紡績に適する洋花（米國種棉）栽培の傾向著しきものあるとに依り漸次輸出向棉花の増加を來」たすようになっていった⁴⁰⁾。こうして、沙市の周辺地域は、1930年代には、先に見たように、米棉の栽培の盛んな地域となっていた。

浙江省では、1934年の調査によれば、平湖においては約200万疋、海寧および紹興においてはそれぞれ約80万疋、余姚および鎮海においては10万疋以上の土布が生産され、硤石においては約100万疋の土布が販売されていた⁴¹⁾。ただし、硤石においては、ほとんど棉花が栽培されていなかったため、綿糸を購入して土布を織っていたが、20世紀初頭に、洋糸が流入するようになると、土布の原料も土糸から洋糸へと急速に転換していったと言われ、早くから紡糸と織布の工程は分離していた⁴²⁾。また、平湖においては、棉花生産地の農民は、自ら栽培した棉花を糸に紡いで土布を生産していたが、20世紀初頭に洋糸が流入すると、非棉花生産地において、その洋糸を原料にした土布の生産が発展し、土糸のみを用いた旧来の土布を駆逐していった⁴³⁾。これに対して、浙江省の中心的な棉花生産地であった余姚県と慈谿県において生産された土布は、20世紀前半になっても、全く洋糸を用いることなく、縦糸と横糸の両方に土糸を用いており、農民は、土棉を栽培し、土糸を紡ぎ、土布を織って販売していた⁴⁴⁾。

以上の分析から、華北では、棉花生産者と土布生産者は相当程度分離していたことがわかった。これに対して、華中では、状況はかなり異なっていた。洋糸の流入後に江蘇省の南通において主要な新土布となっていた中牌や大牌は、縦糸と横糸の両方に洋糸を用いたが、南通は、棉花生産地であり、土布生産者と棉花生産者が一致する場合もあった。また、江陰や常熟などの土布の多くは、縦糸には洋糸を用いたが、横糸には依然として土糸を用い続け、土棉の栽培、横糸用の土糸、土布の生産が一貫して行な

われていた。さらに、湖北省の家郷地方や浙江省の余姚県・慈谿県においては、土棉、土糸、土布の一貫した生産が存続していた。これは、農民が、土糸のための棉花を栽培するのであれば、販売価格が米棉に比して多少安くとも生産コストの低い土棉を選択した方がよいと判断したためであろう。

また、これと関連して、土糸生産の担い手にも注目する必要がある。たとえば、米棉の栽培を受け入れられることなく、土棉のみを栽培し、土布生産を盛んに行っていた常熟にかんする調査の中において、極めて興味深い報告がなされている。すなわち、常熟県城に近く、棉花を全く産出しない農村においても、「常熟縣城から棉花を購入して来て、自ら糸繰機で手紡し、それを更に自家製織して衣服に用ふる」と言われていたのを受けて、調査者が「自家製織は兎も角、自ら手紡などは紡績糸が澤山上海から運ばれて来てゐる縣城にも近いし、あり得ないと主張したら、被調査者の老媪は目前で手紡してみせて、何うだと云ふ顔を以て應へられた。棉花を産出しないで、紡績糸の容易に手に入る地方に於てさへ然りだとすれば、……棉作地帯に於ける手紡・土布製織は、中支に於ても未だ相当残存してゐるものと云はねばならないであろう」と説明している⁴⁵⁾。

以上の調査報告において非常に興味深いのは、非棉花生産農家においても、わざわざ棉花を購入して紡糸を行なっていること以外に、その紡糸の作業が主に老婆によって行なわれているのではないかと推測できることである。そして、非棉花生産農家の老婆が、わざわざ棉花を購入してまでも紡糸を行なっているとすれば、棉花生産農家の老婆は、購入しなくても手元に棉花があるから、なおさら、その棉花を用いて糸を紡いだであろうと考えられる。

実際、他の資料では、常熟の棉花生産地の農民は、家庭内の老人や子供の労働力を利用して、自ら横糸を紡ぎ、一家の収入を増加させていたと報告されている⁴⁶⁾。もし、棉花生産農家において縦糸と同様に、横糸用の綿糸をも購入することになれば、老人や子供の仕事を奪うことになる。よって、洋糸は縦糸に用いるのみであって、横糸と縦糸の両方に洋糸を用いて土布を織ることはなかった。

棉花の栽培、紡糸、織布の各工程の分業化が、華

中に比して相対的に進行している華北の方が、発展段階としてはより高い段階にあるという評価は、果たして妥当なものであろうか。在来綿業の再生産構造の一形態である、棉花の栽培、紡糸、織布の一貫した生産は、自給自足的な自然経済であり、発展段階としては低いものであると見なされがちであるが、華中における在来綿業の実態を見ると、このような捉え方に問題があるように思われる。

- 1) 小山正明「清末中国における外国綿製品の流入」(近代中国研究委員会編『近代中国研究』第四輯, 東京大学出版会, 1960年), 副島圓照「日本紡績業と中国市場」(『京都大学人文科学研究所 人文学報』33号, 1972年)を参照。上記の研究は、中国国内の地域差に配慮して、各区域ごとに分析した点に特長がある。
- 2) なお、中国綿業の近代的再編における阻害的現象について、価格差などに着目する従来の見方に対して、地域差を重視し、棉花をも含み込んだ市場構造を分析した黒田明伸「中国近代における綿糸棉花市場の特質」(『歴史学研究』第624号, 1991年10月), および、流通構造を中心に検討しながら中国近代化の構造的特質を明らかにしようとした足立啓二「中国における近代への移行——市場構造を中心として——」(中村哲編『東アジア専制国家と社会・経済』青木書店, 1993年)の研究があり、両氏の構造分析に重点を置く手法に同意する。ただし、本稿では、市場構造や流通構造ではなく、再生産構造の分析を行なった。
- 3) 前掲、「支那棉花ニ関スル調査(湖北省, 河南省)」191-192頁。
- 4) 巖中平『中国棉紡織史稿 1289—1937年——從棉紡織工業史看中国資本主義的發生与發展過程——』(科学出版社, 1955年。以下、『中国棉紡織史稿』と略記する)260頁。なお、資料の出典は、全国經濟委員会棉業統制委員会編『河南省棉紡織品産銷調査報告』(未発表)となっている。
- 5) 前掲書、『民国二十五年中国棉産統計』37-42頁。
- 6) 前掲、「支那棉花ニ関スル調査(山東省, 直隸省, 山西省)」125-126頁。
- 7) 同上, 121頁。
- 8) 前掲書、『中国棉紡織史稿』259頁。
- 9) 前掲、「支那棉花ニ関スル調査(山東省, 直隸省, 山西省)」40頁。
- 10) 前掲書、『中国棉紡織史稿』258-259頁。
- 11) 前掲、「支那棉花ニ関スル調査(山東省, 直隸省, 山西省)」82頁。
- 12) 前掲書、『中国棉紡織史稿』257頁。

- 13) 北支経済調査所編『瀋陽土布業調査報告書』(南満州鉄道株式会社調査部, 1942年) 22頁。
- 14) 前掲書, 『中国棉業史』 215頁。なお, 高陽の土布業については, 呉知著, 発智善次郎・岩田弥太郎・近藤清・信夫清三郎訳『郷村織布工業の一研究』(岩波書店, 1936年)。なお, 原典は, 呉知『郷村織布工業の一研究』商務印書館, 1936年)をも参照。
- 15) 張世文『定県農村工業調査』(中華平民教育促進会, 1936年) 80頁。
- 16) 同上書, 50-51頁。
- 17) 前掲, 「支那棉花ニ関スル調査(江蘇省, 浙江省, 安徽省)」 68頁。
- 18) 前掲書, 『中国棉紡織史稿』 260頁。なお, 資料の出典は, 前掲書『華東区四省棉紡織品産銷調査』, および, 実業部国際貿易局編『中国実業誌・江蘇省』(第八編) 89-90頁となっている。
- 19) 徐新吾主編『江南土布史』(上海社会科学院出版社, 1992年) 610頁。同書は, これまで公表されず, 入手不可能だった, ささまざまな聞き取り調査や報告書などからの引用が多く, 一次資料ではないが, 内容的には貴重なものを含んでおり, 資料的価値も高いと思われる。今後, 同書の依拠した一次資料が全面的に公表されることを強く期待する。なお, 南通の土布業については, 星野多佳子「近代中国における在来綿織物業の展開——南通の土布業について——」(『日本大学史叢』第49号, 1992年10月)が, 詳しく論じている。
- 20) 同上書, 622頁。
- 21) 林学百『近代南通土布史』(南京大学学报編輯部, 1984年) 34頁。
- 22) 同上書, 146頁。
- 23) ただし, 日中戦争中には, 「土布生産に使用される原料棉花は, 自己の農場から生産される棉花を手紡して綿糸にしたもの, 及び購入綿糸の二つから成り立っている。而して経糸は購入綿糸を, 緯糸は自給綿糸を使用するのが普通である」とも言われている(南満州鉄道株式会社上海事務所調査室『江蘇省南通県農村調査報告書』満鉄調査研究資料第38編, 上海満鉄調査資料第51編, 1941年, 122頁)。だが, もちろん, 日中戦争中は, 全国的に土糸・土布の生産が広く復活し, そのために棉花の消費量が増加したとされていることから(興亜院華中連絡部『上海ヲ中心トスル中支棉花事情』興亜院華中資料第74号, 中調聯商資料第14号, 1939年, 14頁), 単純に日中戦争前と同列には論じられない。
- 24) 前掲書, 『江南土布史』 543-544頁。
- 25) 同上書, 565頁。
- 26) 同上書, 470-479頁。
- 27) 同上書, 508-513頁。
- 28) 趙如珩編『江蘇省鑑(下冊)』(新中国建設学会, 1935年) 第6章, 143頁。
- 29) 前掲, 「支那棉花ニ関スル調査(湖北省, 河南省)」 136頁。
- 30) 「漢口を中心としての綿絲布」(『大日本紡績聯合会月報』第308号, 1918年4月) 21-22頁。
- 31) 前掲書, 『中国棉紡織史稿』 262頁。なお, 資料の出典は, 前掲書『華東区四省棉紡織品産銷調査』(未発表)となっている。
- 32) 前掲, 「支那棉花ニ関スル調査(湖北省, 河南省)」 137頁。
- 33) 国松文雄・岩田彌太郎編訳『支那棉花の問題』(興中公司大阪出張所, 1938年) 252-253頁。
- 34) 横浜正金銀行調査課『湖北の棉花』(調査報告第102号, 1936年) 16-17頁。
- 35) 「沙市織布公司新設」(『大日本紡績聯合会月報』第248号, 1913年4月) 42頁。
- 36) 「沙市綿布」(『大日本紡績聯合会月報』第97号, 1900年10月) 37-38頁。
- 37) 「沙市綿布(承前)」(『大日本紡績聯合会月報』第98号, 1900年11月) 30頁。
- 38) 「沙市地方の土布」(『大日本紡績聯合会月報』第279号, 1915年11月) 38頁。
- 39) 森時彦「華西のマンチェスター——沙市と四川市場——」(『東洋史研究』第50巻第1号, 1991年6月) 97頁。
- 40) 「沙市棉花状況」(『大日本紡績聯合会月報』第377号, 1924年1月) 61頁。
- 41) 前掲書, 『中国棉紡織史稿』 261頁。なお, 資料の出典は, 前掲書『華東区四省棉紡織品産銷調査』(未発表)となっている。
- 42) 前掲書, 『江南土布史』 693頁。
- 43) 同上書, 677頁。
- 44) 同上書, 664-665頁。
- 45) 南満州鉄道株式会社上海事務所『江蘇省常熟県農村実態調査報告書』(上海満鉄調査資料第34編, 1940年) 51-52頁。
- 46) 前掲書, 『江南土布史』 531頁。

おわりに

農民が米棉の栽培を受け入れるか否かについては, もちろん, 自然的, 気象的条件および輪作体系の差異が大きな規定要因であったことは言うまでもないが, これに加えて, 在来綿業の再生産構造のあり方も, 重要な規定要因だった。

米棉の栽培を受け入れた地域は、非棉花生産地と棉花生産地とに大別できる。このうち、非棉花生産地で米棉の栽培を受け入れた典型的な地域が、陝西省や山西省および蘇北の沿海地域だった。これらの地域で米棉の栽培が受け入れられたのは、陝西省や山西省では、米棉が華北の気候に適していたこと以外に、その収益が他の作物よりも高かったためであり、また、蘇北の沿海地方では、アルカリ土質のゆえに従来は一般作物の栽培が不可能で、米棉のみが栽培できたためだった。逆に、棉花生産地で米棉の栽培を受け入れた典型的な地域が、河北省晋県や湖北省沙市周辺地域だった。晋県の棉花生産農家は、自らは土布を生産せず、棉花のほとんど全部をそのまま販売していたため、米棉の栽培による収益が明確に土棉のそれを越えると、急速に土棉から米棉へ栽培を転換していった。また、沙市周辺地域では、土布の生産が盛んで、従来は、その原料として土棉・土糸を必要としていたが、やがて、土布の販売先の需要に合わせて、土棉・土糸を用いた旧来の土布の生産から、購入した洋糸を用いた新土布の生産へと転換していったため、旧来の土布の原料となっていた土棉・土糸に対する需要は減少し、棉花の栽培は土棉から米棉へと転換していった。

一方、米棉の栽培を受け入れなかった地域は、古くから棉花の栽培が盛んだった上に、その棉花を用いて土布を生産していた。その典型的な地域が、江蘇省南部の上海周辺地域、湖北省東部の家郷地方および浙江省東部の杭州湾沿海地域だった。

米棉は、土棉に比べて生産コストがかかるが、紡績工場が必要とする高番手細糸用の原棉として適していたため、販売価格が高く、収益性は高かった。このため、当初より紡績工場のための原棉を生産し

て販売しようとする棉作農民は、土棉よりも米棉を栽培するようになった。

これに対して、土棉は、衣服の中入れ綿、布団綿、綿毛混入の織物やカーペットの原料、混綿用あるいは低番手太糸の原棉として適していた。そして、土棉を栽培する農民は、自ら生産した棉花の全てを売り出すのではなく、その一部を冬季用衣服の中入れ綿や布団綿として自家消費し、さらに土糸・土布の原料としても用いていた。しかも、華中では、土糸・土布の生産は、主に婦女子による副業として行なわれていたが、その土糸・土布の販売は、家計の中で一定の重要な部分を占め続けていた。よって、土布の原棉としては、米棉に比べてむしろ生産コストのかからない土棉の方が好まれた。

単純に計算上からすれば、農民が米棉の栽培を受け入れるのは、非棉花生産地では、米棉の栽培による収益が他作物による収益よりも高いという条件で十分だが、棉花生産地で土糸・土布の生産も盛んな地域では、米棉の栽培による収益が、男子の棉花栽培による収益と婦女子の紡糸・織布による収益との合計分を明確に超過するほどでなければ、土棉から米棉への栽培の転換は起こりにくいと考えられる。さらに、現実には、これに老人や子供による紡糸の作業が加わり、家族構成員全員の労働力が完全燃焼されていた。

このように見てくると、土棉、土糸、土布を一貫して生産するような農民にとっては、もし土棉の栽培を放棄せざるをえないような事態になれば、それは同時に従来行なってきたような形態での土糸・土布の生産をも放棄することにもつながりかねなかったわけである。